

新任教員紹介

建築学科・専任教授 岩崎克也

略歴

1964.3 千葉県生まれ
1982.3 千葉県立船橋西高校卒業
1986.3 東海大学工学部建築学科 卒業
1991.3 東海大学大学院工学研究科建築学専攻
博士課程前期（修士）課程 修了
1991.4-2020.3 株)日建設計.設計部門
2007.9-2013.3 東海大学工学部建築学科非常勤講師
2009.4-2013.9 東京電機大学未来科学部非常勤講師
2020.4- （現在に至る）



担当科目

建築デザイン演習 1, 建築デザイン演習 4, 建築デザイン演習 5, 建築法規, ランドスケープ, デジタルデザイン演習, 入門ゼミナール, 卒業研究, 卒業論文・卒業設計

研究活動内容

「キャンパス建築の公開性」に関する研究と実践

1. はじめに

現在、都心のキャンパスは次の時代を見据えた変革が求められている。その理由は大きく二つあるが、一つは「キャンパスの都心への回帰」である。2002 年以降、国の施策として「高等教育分野における規制改革」が加速すると、大学はそれまで厳しく規制されてきた学部の教育課程の大幅な編成の自由を認められ、その結果、新しい名称や教育課程をもつ学部が新設できるようになった。

また、1960 年頃に成立した「工業（場）等制限法」によって都心で大規模キャンパスの開設が制限されるなか、規模拡大を目指した大学は郊外へと移転してきたが、2002 年にこの法律が廃止されると、大学は学生確保の観点から都心へ回帰するようになった。こうした政治的改革をきっかけとして、長年、狭隘な敷地の中で硬直化していた都心キャンパスを再編しようという動きが進んでいる。

もう一つの理由は「2018 年問題」である。2018 年以降、18 歳人口の減少期と連動して大学進学者の減少が予想されている。この「2018 年問題」は国公立・私立を問わず、経営と学力維持の両面で大学の深刻な課題となっている。このような時代背景のなか、新しい都市型に大きな期待を寄せているのが実情である。これらを受けて、本研究は今後のキャンパスと都市への公開性と、学修環境「コモンズ」の空間配置との関連性を主なテーマとしている。

2. 研究の概要

2-1 地域との新しい関係：キャンパスを都市に開く

1960 年代半ばの大学紛争の結果、日本の大学キャンパスは都市の中で塙によって閉ざされていたが、近年、都市と大学の関係が変化するなかで「キャンパスを都市に開く」というあり方に変わりつつある。この新しい都市型キャンパスの大きな魅力は、学生時代から社会と連携する意識を育む環境にあるが、そのメリットは次の 3 点に整理することができる。

一つ目は「教育研究」の観点。近年の学術は専門分野に特化するだけでなく領域横断型の知恵が求められるようになり、座学にとどまらず実学フィールドワークや産学官民・地域連携が重視されている。こうしたなかで、大学は市民・企業・自治体との連携を現場レベルでより深める必要性が高まっている。

二つ目は「学生生活と都市の賑わい」という観点。街に学生が増えることで、学生生活の延長の場として都市が活気づくといえる。また学生の働く環境としても有用である。加えて学生や教員は、高密度化した利便性の高い都市のメリットを活かして、自らのネットワークや知見を広げることにもできる。こうしたことは他大学との交流や就職活動にも寄与している。

三つ目は「大学経営」の観点。都市の魅力とキャンパスの立地そのものが、優秀な学生・教員・非常勤教員を集める要因になると考えられる。この傾向は実験・研究機能をもつために広い面積を必要とする理工系学部よりも、文科

系学部に強い傾向にある。

2-2 実践：コモンズ空間の配置による建築への展開

基礎的な研究を基にキャンパスコモンズ空間の連結配置を行ない、実際の建築設計への展開を試行している。

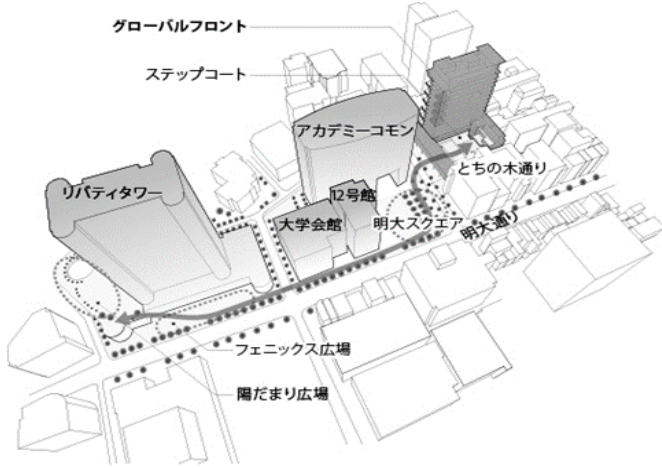


Fig. 1 回遊動線を持った明治大学・駿河台キャンパス

「明治大学・駿河台キャンパス群」は、敷地の高低差を建物の内部にも取り込んだ。隣接する大学施設「リパティタワー」の屋上の庭と「アカデミーコモン」の明大スクエアと呼ばれる広場、それに今回新たに計画をした「グローバルフロント」の足元のステップコートという三つの空間を回遊することをテーマとした。前面道路の明治道路をキャンパスと見立て、回遊動線に沿ってロビーや図書館、カフェなどを配置することで、キャンパスのコモンズ・スペースが街に滲み出るように計画した。雑居ビルで埋め尽くされてしまう通り沿いのこの場所に奥行きと広がりを与え、拡張しながらネットワークを構築する都市のパブリックスペースを生み出した。

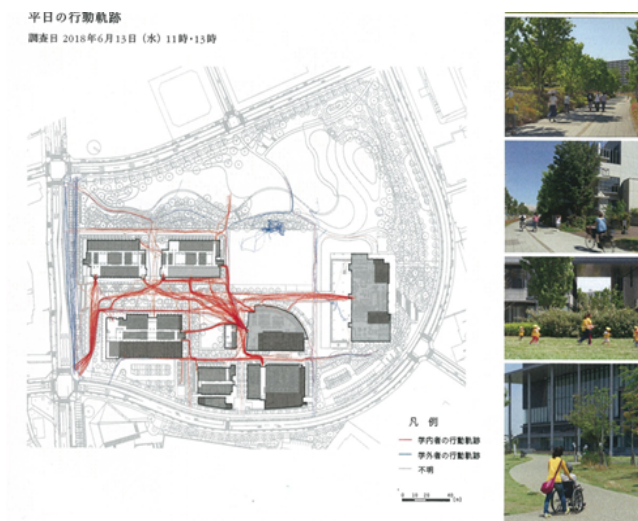


Fig. 2 東京理科大学・葛飾キャンパス行動軌跡調査
「東京理科大学・葛飾キャンパス」の南側と北側にそれぞれ

れ葛飾区の公園が隣接するこの敷地は、葛飾区と連携を図りマスタープランを作成することによって、公園と一体化した開放的なキャンパスを実現した。キャンパス内には図書館、研究室、講義室、管理棟、実験棟、体育館という六つの建築群を計画した。

図書館は、葛飾区民も利用できるようになっており、さらに1階の科学教育センターという施設を葛飾区が運営することで、行政と大学の関係をより密接なものにしている。

キャンパス全体としては南北の公園を結ぶ「ガーデンパス」という小径をつくり、これに直交するかたちで長さ約250m、幅30mの「キャンパスモール」という軸を設けている。このガーデンパスとキャンパスモールに沿って、食堂・売店・ロビーといった交流のためのスペースを配置した。

このキャンパスでは、平日・休日の時間ごとの「人の行動軌跡」を調査し、それら結果を次なる計画にフィードバックを行うことで、デザインの質の向上を図っている。



Fig. 3 上智大学・四谷キャンパスソフィアタワー

「上智大学・四谷キャンパスソフィアタワー」は、低層部を学生のための大学、高層部は眺望を求めるオフィスにすることで、お互いのメリットを引き出す関係を成立させた。1階には800名の大教室や大学の研究内容を発信するギャラリー、カフェ、留学生ラウンジ、3-5階の吹き抜け回りには、学修コモンズを配置しキャンパスの公開性を高めた。

3. 今後の展開

今後は、これまで継続的に調査・研究を行ってきた国内外50以上の教育施設の考察を深め、より具体的なキャンパスの公開性とコモンズ空間の配置による関連を分析することで、これら空間のキャンパス内での位置づけや、建物全体の重要性を示していることを明確にして行きたいと考える。

参考文献

- 1) 岩崎克也 編著：未来を拓くキャンパスのデザイン、彰国社、pp.12-145、(2018)。
- 2) 二宮彩、郷田桃代、諸田政彦、一色千暁、岩崎克也、櫻井雄大：地域に開かれた大学キャンパスの人の行動軌跡に関する研究、日本建築学会大会(北陸)、(2019)。